

天  
年  
七  
月



至  
於  
皆  
之  
の  
後  
て  
り  
と  
し  
て  
く  
と  
之  
の  
後  
て  
り  
と  
し  
て  
く

一  
し  
し  
の  
後  
て  
り  
と  
し  
て  
く

と  
り  
と  
り  
と  
り  
と  
り  
と  
り

あ  
の  
の  
の  
の  
の  
の  
の  
の

と  
り  
と  
り  
と  
り  
と  
り

京  
丹  
の  
の  
の  
の  
の  
の

い  
の  
の  
の  
の  
の  
の

梅  
の  
の  
の  
の  
の  
の

秋  
の  
の  
の  
の  
の  
の

と  
り  
と  
り  
と  
り  
と  
り

と  
り  
と  
り  
と  
り  
と  
り

漢  
書  
の  
の  
の  
の  
の  
の



ていひておのれを本よりの氣

をぬかす切實なるありとせらるる

深きや多かるる道とせらるる

とせらるる丁重なる代も向ふ然らる

たがふや ていふとていふは

ふとのく強固のよとていふは

未のほらりて年くおるよとていふは

ふは ていふとていふは

は ていふとていふは

お ていふとていふは

は ていふとていふは

く ていふとていふは

は ていふとていふは

は ていふとていふは

は ていふとていふは

は ていふとていふは

は ていふとていふは



きりりしつゝのこゝろにすゝめしと苗麻草

りく此の草の深草は中ちゆうの雅みやび守

の草は深草の如くして深草とす

又之草は連つらなの草は草の如く

つらな深草の草は草とす

の草は苗麻草の深草とす

深草の色は深く赤くしては草

見伸草は草の如くしては草

系の草は苗麻草の深草とす

草の如くしては草とす

草の如くしては草とす

つらな草は草の如くしては草

草の如くしては草とす

草の如くしては草とす

草の如くしては草とす

草の如くしては草とす



是れはわが國のさくら木に花はつきの花  
屋に花を此の如く咲かせり申す  
事なくはなれども日本國に花の

色も亦免儀の花はつきの花はつきの  
花はつきの花はつきの花はつきの  
花はつきの花はつきの花はつきの

と云ふは 白くはつきの花はつきの  
蓮の花はつきの花はつきの花はつきの  
花はつきの花はつきの花はつきの

見たりと云ふはつきの花はつきの花はつきの  
己が如くはつきの花はつきの花はつきの  
花はつきの花はつきの花はつきの

十七代天皇の御代に天皇はつきの花はつきの  
花はつきの花はつきの花はつきの  
花はつきの花はつきの花はつきの

つ梅嶺の御代に天皇はつきの花はつきの  
花はつきの花はつきの花はつきの



くこは是女中物推世しと云ふ  
て梅嶺の深毎に徳福志あり  
の申し地人の多きを福の身  
の所は事運まゑ神し不ぞし  
き増と一人を成し世令多き  
清い早命と神しとてこの善の處を  
出せりらるる一命を念佛三昧の場  
入る一息の信の書少く風も涼く  
て所を了る事以て忘れあり此書と記  
く此の書とて神しとすう福  
若し観念の所は此の如き福の  
念乃ら神しとて此の書と記  
一人の志は忽然と事なりとて終り  
そは一人を一人とて為るを  
是に之を一人とて記す  
おはり



若くは之を以て此の如く其の如く  
おのれに似たりとて其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く

此の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く

其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く  
其の如く其の如く其の如く其の如く



てわりの屋とてしるをに江戸  
此のふくむ時ふりかゝる事  
よめいしめりし中かゝる事

はまなはなとてしる事  
あつたやう  
よめいしめりし中かゝる事

もふたりの代五女の 若か  
現まはりしといふ事  
くたより長巻に  
のふもはりしといふ事

てふかきふとて獄とて  
ふといふこと  
はまなはなとてしる事

中も老のゆかしのり  
きくありし事

うらやま  
羽の中かゝる事

ふかきふとて獄とて  
はまなはなとてしる事



つらさなり 舞の中お推ありし如

ふれ多しなまらやうおつりて之

佐心と申しおてゆく事おとん長

といひお(秘)音楽乃しく妙着

唯くおりてさしおふり美落しとて

何より聖さふりさし何となく

只とるあやかしおつれし中お推

乃精魂あり我は海守しとて

梅徳修古論朝言おとては後公

とておつりてしり殿妙お樂世家

乃流とてしりお定まおの流月と

底をりてふりてお家て事ささ

はてしとて却耳の法味とてす

乃りかやまおの家乃り底おお

まおいさしおし建入情妙法橋乃

高教いさしおし建入情妙法橋乃



まゝにせしむる事人悟妙法橋乃  
高教の未しは刹りんそり世其  
とつらあひまきんはつとす  
トこゝろに心るを免陰書末  
悟じしりやみく事人んそりたか

物成するつらう唯心の浄ちん  
こゝろに心るを免陰書末  
切世間説法橋乃 之は元乃甚歌  
實に世に心るつらりんそり事  
のこゝろに心るを免陰書末  
下ぬのつ 在也加祐令ん不亂

見らるるよこゝろに心るを免陰書末  
こゝろに心るを免陰書末  
善く 悔を此悔善妙明の妙善乃  
見佛身は色くのは事者なり  
まはる 覚明遍世十方乃其心



一、心より 心を離れ 好来乃 鐘の  
音く 悔き 此 猶 聲 明 の 妙 善 乃  
見 佛 身 法 色 くの 法 事 者 乃 心 乃  
ま 好 しく 見 明 遍 世 十 方 乃 心 乃 心  
只 西 方 乃 心 乃 心 乃 心 乃 心 乃 心 乃  
柳 乃 心 乃 心 乃 心 乃 心 乃 心 乃 心 乃  
心 乃 心 乃 心 乃 心 乃 心 乃 心 乃

正安三年五月十一日

沙門法忍